

【教員寄稿】

ポルトガル語の可能性 —まったくもって個人的な見解—

拝野 寿美子

ご挨拶

皆さん、こんにちは。2024年4月から2年生の必修科目でもお世話になることになりました、拝野寿美子（はいの・すみこ）です。神田外語大学外国語学部イベロアメリカ言語学科ブラジル・ポルトガル語専攻（長っ）の教員で、上智・ポル語の卒業生です。卒業後はいったん一般企業に就職したのですが、ブラジルに関わる仕事がしたいという気持ちを捨て切れませんでした。ブラジルに執着していたのは、大学3年次に留学したブラジルのインパクトがあまりに大きかったから、あるいは、帰国する時にホストファミリーから“Volte sempre!”と言われたからかもしれません（執着していたと言いながら、帰国後25年以上もブラジルに行きませんでした）。ありがたいことに、卒業論文の指導を担当していただいた三田千代子先生のご紹介で、1994年9月に上智大学ポルトガル・ブラジルセンター（現在のイベロアメリカ研究所）の嘱託職員になることができました。

研究を始めたきっかけ

ちょうどこの時期、日本に住むブラジル人が増加していました。ブラジル留学時代にできた友人も日系人と結婚し、日本に働きに来ました。思いがけない日本での再会に驚くと同時に嬉しくもありました。一方で、不慣れな工場労働や言語の壁に悩む彼女からSOSが来ても、大した支援ができず心苦しくもありました。この夫婦は日本で子どもを授かりましたが、教育はブラジルで受けさせたいと帰国していきました。日本ではダメなのか？

そんなこんなの2002年4月、私は放送大学大学院の1期生となり「日本に住むブラジル人の子ども」の教育に関する研究を開始しました。仕事を続けながら学べる大学院で2歳の長女を調査に連れていったりもしました。子どもを連れて行くと調査相手も警戒心が弱まり、いろいろと話してくれました。2004年4月に東京学芸大学大学院博士課程に入りました。ここも働きながら通える大学院でした。次女が生まれたのがこの時期で、産休・育休中に論文を仕上げました。

教師はつらいよ

2004年から2019年まで、上智大学で夜間に開講していた社会人向けのポルトガル語講座の入門クラスを担当させていただきました。これを機に、私のポルトガル語は「学んだことのあるポルトガル語」「ちょっとばかり使うポルトガル語」から「教えるポルトガル語」

へと急展開していきます。社会人の受講生のなかにはブラジル駐在経験者や、ブラジルに移民していた人までいました。「先生、サンパウロではこう言いますよ」「先生、こんなブラジルのジョーク知っていますか？」(ねえ皆さん、どうして入門クラスに入ってくるわけ?)。ほかの言語を習得している受講生からは「その発音はフランス語の〇〇に当たりますか?」とか、「スペイン語のこの意味ですね」などと、容赦ない質問が来ます(知らないって、そんなこと・・・)。そして、授業がつまらないと途中で帰ってしまったり、次の授業からパタリと来なくなったりするのです(やめたいのはこっちだ・・・)。

学生から教えてもらう

2008年からは現在の本務校である神田外語大学で、非常勤講師として大学生にもポルトガル語を教えるようになりました。ここから更なる悲劇が！私が研究してきた「日本に住むブラジル人の子ども」である学生たちがいるではありませんか！私よりもよっぽどポルトガル語が上手い学生たちに私は一体何を教えられるというのか！！ある学生は私のポルトガル語の間違いにしっかり気づき、その度に隣に座っている彼女と同じブラジル・ルーツの学生にささやくのです(なぜか私にもうっすらと聞こえる)。おお、絶体絶命。授業のたびに「今日はどう乗り切ろうか」と必死に準備をしました。そんなある日、準備の甲斐なく私は冠詞の使い方を間違えました。そして例のごとく「え～、そこで冠詞つけないよね～」とささやく声が。授業が終わり、私はついに彼女を呼びとめ「間違いは、私に言ってくれていいから。あなたが優秀なのはわかっているから」と伝えたのです。その後、ぱったりと「ささやき」はなくなりました(私が間違えなくなったから、ではありません)。

母校でさらに磨きをかける

上智大学では2014年から、輪講のほか「ポルトガル語科教育法 B」を担当させていただいています。履修する学生には毎年伝えているのですが、私が学生時代に履修した同様の授業の成績は「C」(現在の D)。結構頑張ってレポートを書いたはずなのに。成績表を見た時がっくり(|_| |)したことを今でも覚えています。そして、今その授業を担当しています。当時の先生には担当していることをご報告しましたが、私の成績が「C」だったことは覚えていらっしゃらないようです(覚えていないふりをしてくださっているのかもしれませんが。先生って、ありがたいですね)。皆さんのなかには、こういう教師には教えて欲しくないと思う人もいるでしょう。悪しからずご了承ください。私は、これからも皆さんに鍛えてもらいながら、ポルトガル語の力をつけていきます。「学び続けるポルトガル語」です。そして、私を半面教師にして、あなたも20年後に母校の教壇に立ってください。ポルトガル語には、そういう(どういう?)可能性が 있습니다。

では、また。